

第一章

伝えるし”こと・ことばのしごこと



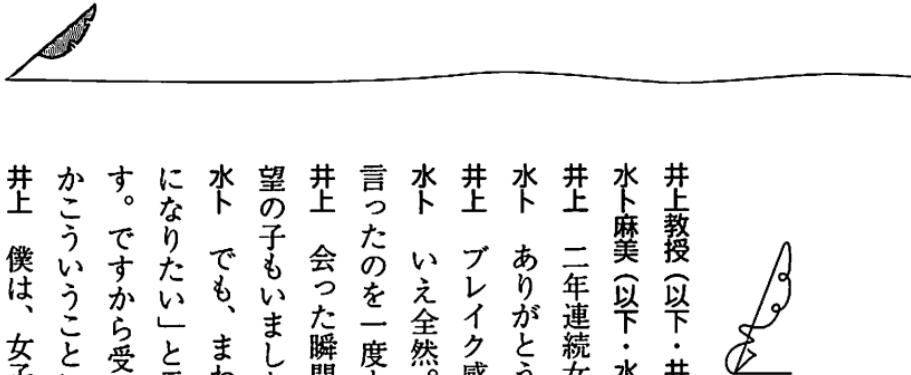
水卜 麻美

みうら あさみ◎日本テレビアナウンサー。慶應義塾大学文学部英米文学科2010年卒。



司会
井上 逸兵

いのうえ いっぺい◎英米文学専攻・教授。慶應義塾大学法学部・文学部卒、同大学大学院文学研究科修士課程修了、文学博士(慶應義塾大学)。著書:『グローバルコミュニケーションのための英語学概論』(慶應義塾大学出版会、2015)など。



一瞬で空気を変える瞬発力

井上教授（以下・井上） お帰りなさい。

水ト麻美（以下・水ト） はい、ただいま戻りました。

井上 二年連続女子アナ人気ナンバーワン、すごいですね。

水ト ありがとうございます（会場・拍手）。

井上 ブレイク感みたいなのはありましたか？

水ト いえ全然。そもそも、いま思うと井上先生は、私が「アナウンサーになりたい」と言つたのを一度も笑うことなく、「なれる、なれる」と信じてくださつてましたよね。

井上 会つた瞬間わかりました。僕も長年いろいろな学生を見てきて、なかには女子アナ志望の子もいましたけど、ミトちゃんを見た瞬間に「アナウンサーだな」と思いました。

水ト でも、まわりは結構意外だつたようで、就職活動のときに意を決して「アナウンサーになりたい」と言つたら、「冗談でしょ!」みたいな感じで、だいたいの人に笑われたんです。ですから受かつたことが奇跡のようで、入つてからもコツコツとやってきたら、なぜかこうすることになりました（笑）。

井上 僕は、女子アナ志望と聞く前から、女子アナ志望だとわかりました。

水ト 先生にそう言われたのを覚えています。

井上 ゼミの面接にいらしたとき、「これほど人の心をつかむのがうまい人はいないな」と、すぐに思いましたよ。

水ト 入りたくてしようがなかつたんです。

井上 なぜかと言うと、これは「就活」をしていらっしゃる方に参考にしてほしいのですが、まず調べてきます、僕のことを。僕のことを調べてきて、小ネタに「(著書を)読んでる」みたいなことをアピールして、かつ、感情的に訴えかけてくる。あのときに、「あ、きっとそうだろうな」と思いました。

水ト ゼミを選ぶときに井上先生にひと目ぼれして、ぜひこのゼミに入りたいと思つたんです。必死に面接に臨んだのは覚えてます。

井上 女子アナ志望の人は、いわゆるビジュアル的に高い人が多いのですが、もちろん水トさんも高いですが(水ト・笑)、決定的に違つたのは瞬発力です。飲み会とか、いろいろな会でも一瞬で雰囲気を変えられたので、「これはすごいなあ」と。なかなかマネできないと思つていました。

水ト 私、そんなに褒められていいのでしょうか(笑)。いま、瞬発力と言つていただけたのは本当にうれしくて。アナウンサーの仕事は、本当に瞬発力が必要なんです。それこそ

生放送をやつていると、突拍子もない「振り」がきたりするわけです。時間がカツカツの中、でもなんか振られて、となると迷つてはいる時間もない。ひと言でバツと切り返さなくてはいけないという点では、本当に日々鍛えられています。

井上 学生時代から瞬発力はあると思いますよ。そもそも、アナウンサーを目指したのはいつ頃からですか。

水ト アナウンサーになりたかったのは、小学生のときからです。もともとテレビっ子で、「めざましテレビ」*1の小島奈津子*2さんの笑顔を見ながら学校に行くのが習慣だったんです。「あのお姉さん、すてきだな」と思つていて、それがアナウンサーという職業だとわかつて、小学校の六年生の卒業アルバムには「アナウンサーになりたいです」って書いてました。当時からしゃべることが大好きだったんですね。

井上 学生の頃から上手にしゃべっていましたね。

水ト ありがとうございます。

井上 就職が決まったとき、「どんなアナウンサーになりたいか」と聞いたら、「横にひつそりいるようで、実は全体をコントロールできるアナウンサー」と言つていましたよね。どうですか、いま。実現していますか。

水ト いまも目指しているのはそれですね。基本的には、私がしゃべるより芸人たちに

おもしろいことを言つてもらうほうが一番いいわけです。でも、時間の制限があつて、このコーナーのあと一五秒で締めてくださいというときに、芸人さんたちはみんなおもしろいことを言おうとしているし、私も「統いてはこちらです」と言わなくてはいけないという、せめぎ合いが毎回あるんです。そこで私が存在感を出しすぎて、強引に「もう行きますよ」と言うのも変だし、気づいたらサラッと「統いてはこちらです」と言う間の取り方を日々研究しています。会話の空気を読まなくてはいけないという意味で、難しいです。



アナウンサーとしての矜持

井上 僕は、基本的にミトちゃんの仕事はだいたいフォローしていますが、この前、ある週刊誌で女子アナ六〇年史のような企画があつて、歴代の有名アナウンサーの写真が載つていました。ほかの人はだいたいしゃべつてる写真か、ポーズをとつてる写真なのに、ミトちゃんだけなぜか食べてる写真（会場・笑）。あなたはキャラ的に、そうなつているようですね。大食いキャラとか、フードファイターとか（会場・笑）。それはどれくらい計算して、キャラ設定してるのかな？

水ト ほとんど計算は入っていないです。発言に関しては、かなり細心の注意を払っている

ので、一〇〇%素かというと違いますが、学生時代の友だちにも「そのまでテレビに出でるね」と言われます。そういう意味では、最初から素で勝負したところがあります。大酒飲みだし、よく食べるし、というのは当時から変わっていませんし。

でも、こうやつて（姿勢を正して）「こんなには」っていう感じのアナウンサーを想像して入社をして、入社五年目になつて気づいたらこういう感じになつていて。自分でも「あれ、おかしいな」と年々思つてはいるんです。

井上 でも、不本意ではないでしょ。

水ト 少々不本意です（笑）。いつも、「どこかで少しキャラ変更したいな」と言つてるんですけど、毎年挫折しつつ……。自分に特徴がない分、素で勝負したことがよかつたようです。

井上 なるほど。いまは番組が多くて全部見きれていませんが、新人の頃は、一生懸命番組を探して日テレNEWS24*3まで見ていました。たまにニュースを読んでもましたよね。あれ、結構好きでした。すごく丁寧に原稿読んでるな、と思った。新人だから、当たり前と言えば当たり前ですけど。でも、知らない方はフードファイターとしての水トアナしか知らない（会場・笑）。

水ト もう九割。

井上 アナウンサーとして、何かボリシーミたいなものはありますか。

水ト ありがとうございます。本当に、フードファイター的な仕事が九割、九九%ですけれど、アナウンサーとして仕事をしている部分というか、自分の譲れない、少しだけプライドのあるのが、「言葉を大切にする」ところです。

それこそ、ふざけたナレーションを読んでいても、そこで間違った日本語は使わないようになっています。いわゆる汚い言葉、たとえば「やばい」という言葉は基本的には言わない。「この肉やばいね」って、いまの人はみんな使うし、プライベートでも正直使うときもあるんですけど、仕事に関しては「やばい」とは言わないし、どんなに「うまい」「やばい」と言いたくても「おいしいです」と言う。たまに間違えてしまいますが、「すごいおいしいですね」ではなく「すごくおいしいですね」とか。そういうところは、アナウンサーとしての矜持を持つて、細心の注意を払っています。この仕事をしてから、言葉が非常に気になりますね。言い方とか、どの言葉をチョイスして伝えるかとか、相当考えたりします。



「言葉の守り手」として

井上 アナウンサーとして、言葉で困ったこと、あるいは苦労していることはありますか。

水ト 私たちは、「アナウンサーが言葉の最後の守り手である」と考えているんです。言葉は

徐々に変わってくるし、なくなっていく言葉もあれば、最初は若者言葉などと思われていたものが、どんどん普通になつたりもします。けれども、テレビは老若男女、本当に幅広い世代の方に観ていただいているので、基本的には一番厳しい層とかお年寄り、その層に合わせて放送をしていかなければならないと思っています。

そのために、発音や言葉遣いに関しての研修も頻繁に行っています。放送上気をつけなければいけない言葉や、新しい言葉が出てくるたびに検証委員会みたいなものが開かれて、その結果がメールで一斉に配信されたりします。どこまで言葉を守つていくか、どの時点で新しい言葉を使っていいのか、というところは結構難しいです。

井上 アナウンサーの言葉が、日本語のお手本だと思つている人は多いですね。

水ト そういう意味ではかなり気を遣っています。

井上 人間だから間違えたりもするだろうし。想像するに、特に年配以降の方に言われそなのは、敬語の使い方とかですか。

水ト それは本当に言われます。やはり敬語は難しいですね。一緒に出ている出演者の方は身内でもあり、でも年上だしとなると、言葉遣いを気にするあまり、だんだん変な感じになつてしまつたり。あるいは丁寧な言葉を遣つていても、そこが二重敬語になつてしたり、丁寧にしようとして何でも「お」をつけてしまつたりして、いろいろ難しいです。

井上 何でも「させさせていただきます」とか、耳につきますね。

水ト やはりそうですね。そういうところも気をつけなくてはいけない。

難しいところですが、最近話題になつたのが、動物が死んでしまつたときの表現です。たとえば、どこかの動物園のパンダが死んでしまつたというときに、親しまれ方としては、「亡くなりました」と言つても正直しつくりくるところもある。家族のように大事にしているペットが死んでしまつたときには、「亡くなりました」と言いたくなりますが、やはり動物に敬語で「亡くなる」はおかしいのではないか。「死んだ」でいいんじやないか、とか。そういう気持ちの部分と、「いや、でもおかしい」という部分をどう線引きするかは議論されたりします。

井上 そういう議論は、アナウンサー同士でするの?

水ト そうですね、アナウンサー同士でもよく言葉に関して話し合います。

変化する言葉



井上 言葉は変化しますからね。これは言語学の話ですけれど、たとえば「あげる」「やる」という区別が、三〇年前、四〇年前とだいぶ変わっているというのが、言語学のネタとし

てあります。一九七〇年代初めごろ、「最近のお母さんは『子どもにお菓子を買ってあげる』とか言つてるけど、おかしいんじゃないのか?」と、その当時の六〇歳くらいの方が言つてました。いまでは、「子どもにお菓子を買ってあげる」という言葉に、何の不自然さもない。

水ト 「買ってやる」のほうが、むしろ冷たい感じに聞こえます。変わったのはいつなんですか?

井上 それは……わからない(笑)。

水ト 結構最近なんでしようか?

井上 いや、徐々に変わってきたのだと思ひます。言語変化というのは、全体的に一緒に変化するわけではなくて、ある層の人たちが、ある種リードをして変化していくというパターンが多いのです。たとえば、中高生が使つているような若者言葉をだんだんおじさん、おばさんも使うようになつたりする。どこかで一斉に変わっているわけではなく、ある程度時間をかけて言葉が浸透してくる。芸さんが使うような業界用語の「ボケ」と「ツッコミ」はかなり専門的な用語だったと思いますが、いまでは普通の会話で使われています。

「あげる」「やる」というのは、どうしますか?

水ト いまは、一応気をつける言葉の例には挙がっていますが、結構使っています。「あげる」で。

井上 どちらかというと、目下の人には「やる」で、目上の人には「あげる」だったのですが、「やる」「あげる」の区別が、上品・下品になつた。乱暴な言い方か、丁寧な言い方かというふうに変わつてきていて。区別の仕方が変わつてきている感じがします。

水ト そう思います。放送業界でもそういう認識だと思います。年代とか業界とかで、変わりやすい言葉つてあるのでしょうか？

井上 きちんと調査したわけではありませんが、日本の特徴だと思うのは、どちらかといふと社会全体が若者に向いている。たとえばコマーシャルを見ていても、アンチエイジングのコマーシャルが多い。「私、何歳に見えます?」と尋ねたあとに、女性が「六〇歳」と答え「え～っ」つていうものは、若さとは別に年齢を経たうえでの魅力が認められている欧米には、基本的にはあまりないような気がします。日本は年上の人があの真似をして、年上に見られないようにする風潮があつて、若く見られることに価値を置いてますよね。ある意味それは、日本的な特徴ではないかと思います。

水ト そう言わせてみると、テレビの特集でも「若者言葉、これ知らなくて大丈夫?」という感じの企画が多いですね。

井上 知らないとダメみたい。でも、それはおかしい。年配の人が若者言葉を知らないても、何にも困ることはない。そういうところは、メディア論として見ていておもしろいで

すね。

水ト 日本語の変化は、若者から広がっていくのでしょうか。

井上 多い気がします。もちろん年代にかかわらず、たとえばテクノロジーが新しくなると使う言葉が増えたり、いわゆるIT系の言葉が日常の言葉に入ってきたりという流れもあると思います。年代の差とかは、どうでしょう。社会言語学では、「威信」と言いますが、年長であることに社会として価値が置かれているかですね。いま、若者が中高年、大人に憧れてくれるかどうかという点で、ある意味心配なところがあります。一時期のピーテー・パンシンドロームのように「若くいたほうがいい」みたいなところがあると、「大丈夫かな」と個人的には思います。

水ト 言われてみると、本当にそうだと思います。私たちも気をつけなくてはいけない、と言ふと変ですけど、そう言いがちですね。番組の企画でも、若者言葉とか「いま流行つているのはこれですよ」みたいなものが多い。自分たちの影響力、影響力と言うと少々おこがましいですけれど、考えていかなくてはいけないと私は思います。

井上 メディアの影響力は非常に大きいし、伝い手としての責任があります。

水ト 本当に。自分の言った言葉が、会社を代表していると受け取られることがあるので。

井上 「あ、また日テレは」みたいに言われかねない。

水ト ですから、自分の大義もそうですけれど、それこそ偏った発言は絶対にできないですし、言つていいことと悪いことが本当にありますね。いわゆる差別発言ですとか、たとえ間違えて言つてしまつたことでも、それが会社の姿勢としてとらえられかねない部分があるので、発言には気をつけています。生放送でも、しゃべる前に一瞬頭の中で「今からこれしゃべるぞ」と思つてからしゃべります。失言が怖いです。

井上 カットするわけにいかないから。

水ト 本当はパツと言いたいことを、言葉をいつたん飲み込んでから言います。引き返せない、取り返せないですから。

井上 それは怖いですよね。でも、それだけ責任のある仕事もあるし、やりがいのある仕事でもある。

水ト はい。



マスへの戸惑い

井上 僕が興味があるのは、テレビは観ている人の数が、桁が違いますよね。

水ト はい。

井上 我々大学の教授は、たとえば学生が何千人、文学部だつたらせいぜい何百人ぐらいの単位で評判がよかつたり悪かつたりするわけです。それは、自分の体感できる評価だと思いますが、いわゆるマスのレベルになると、何か違う次元の反応というか、感覚になるんじゃないかと思います。それを感じたことがありますか？

水ト そこはかなり、戸惑っている部分でもあります。指標がないのでわからないんです。そのため視聴率だつたり、というところに行きがちですけれど、それもまた違うよね、という議論もなされるし。私も正直、どこの評価を気にすればいいのか、どこの返しを基準に仕事をすればいいかとなると、よくわかりません。でも、自分基準になりすぎると、それもまた違う。はじめはそれこそスタッフさんだつたり、地元の友だちの評判を聞いたりして、結果、立ち返ると近しい人の評価になるのかな、と思つています。最初はやはり全体評価が気になつて、数字や街の声、ネットの評判が気になつっていた時期もありましたが、いまは立ち返つて母とか、昔からの友だちとか、そういうところに帰つてきますね。

井上 それはおもしろいですね。マスがある程度のレベルに行くと、むしろ周りの体感できる人たちの評価が指標となる。

水ト そうですね。この仕事をしていると、自分の知らない人から嫌われていることがあると思うと、正直かなりつらいし、いろいろな評判も気になりますが、気にしそうだと自分

が押しつぶされるということがわかつて……。悩みすぎると何もできなくなつてしまふので、結果、母に、「今日の『ヒルナンデス』*4どうだった?」と聞くと、一番率直な答が返ってきます。



自己開示とコミュニケーション

井上 僕も今日のためにネットで「水ト麻美」を検索してみましたが、あなたはあまり悪口を書かれてませんよね。悪口が基本のような掲示板でも、あまり悪くは言われない。それに今日もそうですが、女性ファンが多いですよね。

水ト それは初耳です。

井上 学生の頃から見ていて、すごくモテたと思います(会場・笑)。もしかしたら同性から妬まれるような立場で、周りとうまくやつていく方法、特に女性とのつき合いの方のコツみたいなものはあるんですか。

水ト 仕事柄、雑誌の取材を受けることも多くて、特にアナウンサーはコミュニケーションの仕事ということもあって、上手なコミュニケーションのとり方、たとえば先輩後輩とのつき合い方や柔らかく言うためにはどうしたらいいかとか、そういう話を聞かれることも

あります。私自身、男女を問わず積極的にコミュニケーションをとるよう心がけていますが、女性とのつき合いを感じるのは、飾らずに「弱みを見せる」ということでしょうか。こんな話、正直に言うと恥ずかしいですけれど（笑）、私も“シユツ”としていたい。テレビでも、本当だったらもつときれいな感じで、大口開けずに「ああ、おいしいです」と言いたかったんですが、それは自分があまり好きじゃなかったので。ダメなところを見せちゃうというのが、よかつたのかなと思います。

井上 これは学生時代に勉強したことを覚えてるかどうかわかりませんが、社会言語学でいう「自己開示」ですね。要するに、自分の中を見せることによってコミュニケーションを円滑にする。それを実践されたということですね。

水ト まさに井上先生から勉強して（笑）。でも、そう考えると、自分のやっていたことが、そう分析できるんですね。知らないうちに、「そうだったのか」みたいに。私、基本的に、隠している情報はほとんどないです。かなり情報開示しています。

井上 開示の仕方で、いろいろなコミュニケーションの対人関係をつくることができる。そうしてみると、いわゆる人柄というものをつくり出していく大きな部分は、コミュニケーション力だという感じがします。もちろん、人柄はいいけれどコミュニケーション下手という人もいますが、それもある種の形で人に人柄が伝わっているわけで、そこもコミュニケ

ケーションの一部といえば、意図的なコミュニケーションではないけれど伝わります。

水ト 仕事でも、私のポリシーとして、職場は人間関係がよくないと絶対ダメだと思つてゐるんです。公私の区別をはつきりつけないとダメな方もいると思いますが、私は基本的に友だちも会社の人が多いので、後輩とも積極的に飲みに行きますし、休みの日でも行きたくなるぐらいの会社を目指して、コミュニケーションを図っています。コミュニケーションが円滑だと生まれるものが多くて、それが仕事に生きることもよくあります。

井上 覚えているかどうかわかりませんけど、それは僕のゼミのポリシーでもあります。コミュニケーションが第一。コミュニケーションがあるから、何か知的生産もできる。僕の個人的な考え方でもありますが、知的生産とは、勉強や学問など一人でできそうなものであつても、一緒にやることでお互いに刺激し合い、成長し合つて新しいものができることだと思います。

厳しく楽しかった英米文学専攻

井上 ここで少し話を学生時代に戻して、文学部英米文学専攻言語学で学ばれてよかつたと思うことはありますか。



水ト 大学では、基本的に日本語と英語の比較、たとえば映画のスクリプトを見て、「this」や「that」といった単語が日本語ではどう訳されているかとか、そういうことを勉強していました。私はダメな学生でしたけど、英語の勉強をして「じゃあ日本語と比べてどうなの」となったときに、「自分は日本語のことも全然知らないんだな」と思つたんです。そういう意味では、英語を学ぶことを通して自分の日本語を見直すきっかけになりましたね。もちろんアナウンサーになつてからのほうが、わかつていなかつたことが増えましたが、学生時代に言葉のおもしろさ、難しさ、興味深さを学んだことで、その勉強もとても楽しくできましたし、より日本語を大切にしなくては、という思



いを感じることができました。英語と比べることで「ああ私、日本語でこうやつてしゃべつてたんだな」とか、言葉を大切にするようになりましたね。そういう意味では大変感謝しています。

井上 それは、言語学ということもあります、慶應の文学部全体が言葉を大切にする、そういう伝統がある。そこをよく受け継いでくださった。

水ト 本当に見直しましたね。大切に、一つひとつをしゃべらなくてはいけないんだと思いました。

井上 今日はこの話をしていいかどうか、いま迷っています。

水ト 大丈夫ですか!?

井上 英米文学専攻には、「現代英語学」という必修科目がありまして。普通は二年生までなんですけれど、水トさんはたぶん四年生までやつたはずです。僕はポリシーとして、点数を全部学生に知らせます。そして互いに納得がいつたうえで成績をつけるようにしていますが、あなたは三年生のときに五〇点で合格のところ、四九点だった。

水ト そんなこと言つてしまつて大丈夫ですか!?

井上 大丈夫です。そして僕は、クレームを言いに来てもいいと言つている。

水ト そうでしたね。受けつけてくださいって。

井上 それも勉強だと思つています。「この点数、こうしたら上がるんじゃないの?」というふうに理論武装して来い、と言つてますが、あなたに「どうする?」と聞いたら、潔く「もう一年やります」と。それがすごく印象的でした。

水ト 言いました。もう理論武装する術もなかつたんです(笑)。でも、あの授業大好きで。好きなんですよね。こういう言葉の何かこういう、見てるのが(笑)。言葉の構造とか変化とか、そういうのを図式化することとかがおもしろくて。

井上 あれは相当反響があつたようです。あの頃から目立つていたので、「井上は水ト麻美まで落とした」って。結構引き締め効果があつたようで、ありがたいです。

水ト そうですか、いろいろな効果がありますね(笑)。でも、ポジティブに考えると三年間受け続けてよかったです。楽しかつたです、本当に。今もきっと苦しんでいる人がいるんですね。

井上 いると思います。

水ト 英米文学専攻は本当に楽しかつたです。

井上 英米文学専攻は学内でも厳しいと言われていますが、逆にそれが、結束感の原因になつていると思います。結束感はありますよね。

水ト だから入つたんです、私。

井上 僕はね、学生とか一年生に向けてよく言うんですけど、いわゆる“エグい”という言
い方、英米は“エグい”。

水ト それはもう隠語ですか？

井上 どうなんでしょうね。

水ト まだ放送では使えないです。

井上 僕がよく言うのは、「エグくないとつまらないよ。エグいくらいのほうが、学校来て
楽しいし、いいんじゃないかな」と。

水ト 二年生で専攻を選ぶときも、周りのみんなが、まさか私が英米文学に行くとは思つて
いなくて。もともと英語が好きで興味があつたので、勉強したいと思つていましたが、“エ
グい”という噂は知れ渡つていたので、当時の一年生のクラスの友だちから猛反対され
たんです。専攻提出の直前まで反対されて「ほんとにいいのね、留年するよ」と言われながら
(笑)、「いや、入る。絶対頑張る」って言つて、入つて本当によかつた。

井上 よく来てくれた。

水ト 本当に、さまざまな単位を落として(会場・笑)、温かい先生方に囲まれて、ありが
たいです。

井上 公開講座ということで、会場には高校生の方とか、慶應以外の方もいらっしゃると思
います。

いますが、どちらかというとお高くとまっている大学と思われがちですけど、この大学は大きい大学のようで、文学部は非常に心が通っている。学生と教員のコミュニケーションの量が非常に多い大学だと思います。

水ト そうですね。入ってみてからのほうが、思っていたよりもファミリー感がある。だから私、英米文学専攻に入ったこともよかつたなって思います。ダメな学生にもいろいろ教えてくださいましたし、卒論から何から、何でも相談に乗ってくださつて。そして、卒業後もこれだけコミュニケーションをとつてくださる。そういうのも、周りからは結構珍しいと言われます。

井上 それがこの大学のいいところだよね。

水ト そう思います。

アナウンサーとしての仕事

井上 それでは、ミトちゃんのアナウンサーとしてのいろいろな仕事について、ご紹介いただきましょう。

「（）で水トさんの仕事ぶりを紹介するVTRを流す」

水ト アナウンサーとしての仕事と、アナウンサーではない部分の仕事もあります。

番組ごとに、それぞれで言葉遣いもちょっと変えて いますし、声色も話すスピードも少し変えて います。

はじめに、「ヒルナンデス」は、お昼にゆつたり観ていただきたいと いうこともあって、特に食べ物の紹介のときは、わりと明るめに、語尾を上げる感じでしゃべっています。紹介のナレーションも、生でつけて います。この原稿の言葉遣いは私に任せてもらつて いるので、自分でチェックして、その場で合わせて います。

井上 アナウンサーの仕事は、画面に出て、原稿を読んでるだけというイメージがありますが、そうでは ないのですね。

水ト もちろん、あらかじめVTRに合わせたナレーションが用意されて いるんですけど、映像と合わせて読んでみると自分なりのスピードもありますし。画面に出る最後の責任者が自分なので、表現や言葉遣いが「あれ？」というところは、直すのはもう私しかいな んですね。

井上 まさしく、「（）とばの仕事」ですね。

水ト そこの部分はそうですね。読んでしまえばもう、私の責任、というところがありますから。地名とか、読み方の確認にはかなり気を遣っています。「ニッポン」なのか「ニホン」なのかとか。固有名詞だつたら、一覧になつているものを見て確認したり、どちらでもいいという場合は雰囲気で決めたりします。スポーツ系だつたら、ニホンと言うよりニッポンって言つたほうが、勢いがつく感じがしますよね。「ニッポン、チャチャチャチャ」も、「ニホン、チャチャチャチャ」だとちょっと乗らない感じがする。結構そういうところの言葉を考えたりします。「ビルナンデス」でも、「この表現はどうなの?」ということは、うれしいことに基本的に私に聞いてくれます。言葉遣いとか、日本語の流れでとしておかしくないですか、ということは、私に聞いてくれる。

井上 多くの信頼を得ているわけですね。

水ト まだまだ勉強中ですが。

井上 これは大学教授でも同じで、ずっと勉強。もちろん、終わると思つてないですよね(笑)。



肉体活動と言語活動の同期

水ト ココモちゃん（アニメ「ママモコモてれび」内のキャラクター）の声も担当しました。いまはやっていませんが、（アニメ声で）「かわいい」。

井上 あの声は、自分で考えたのですか？

水ト そうです。もともとあれも、「ヒルナンデス」の「かわいい動物大集合」という特集のナレーションのときに、スタッフさんがふざけて「この子どもの声、子どもみたいにやつてくれない？」と言うので、（アニメ声で）「ママあ、お腹すいたよお」ってやってたんです。たまたま観ていてくださっていた方から、「今度アニメをやるんだけれど、キャラクターの声をやってもらえないか」という依頼をいただいて。あの声は完璧につくって、ブリッ子してやつてます。アナウンサーとしては、声の仕事があるというのすごくうれしいことですし、「誰かわからなかつた」と言われたときが一番うれしい。

井上 わからなかつたです。

水ト 名前を出してないんです。

でも、ココモちゃんのようなアニメのナレーションをやってわかつたことですが、自分がブリッ子しないとああいう声は出ないんです。だから、ただ「かわいい」と言うよりも、

(大きく身振りをつけながら)「かわいいっ!」って言つたほうが、かわいい声が出るんです。

井上 言語学的に言うと、「肉体活動と言語活動が同期してゐる」ということですね。

水ト 知らないうちにつながつてゐる(会場・笑)。

井上 そうです。たとえば、バイリンガルの人が日本語と英語を切り替えたときに、一般的に身振りも変わります。それは、同じ言語で話している人だとわかる。いま何語でしゃべつてゐるか、わかります。たぶん、脳の中で言語中枢と運動中枢が近いところにあって、関係があるのでどうと……。

水ト (笑)。でも本当にそういうことがあるんですか。

井上 本当です。

水ト 確かに、すごく大きな動きをしているときのほうが、おおらかで元気な声が出るし、ジトツとやつてると、「元気なかつたね、あの声」と言われたりすることを思うと、そうだなって思いますね。先輩のナレーションを観察していくと、身振り手振りをつけながらしゃべつている人が多いです。私も、生放送のナレーションで映つてないのに、結構「こちら!」とか言つて、手をつけたりします。

井上 やはり関係あるのでしょうね。たとえば、高校野球の選手が声を出しながら動いたりしますが、声を出したほうが体が動く。ただ気合いを入れたり、元気づけているだけじゃ

ない。やはりそこは長年の経験で、体の動きと声に相関があることがわかったのだと思います。



駅伝と言語学

水ト 箱根駅伝のナレーションの仕事もいま、頑張っています。

井上 箱根駅伝のナレーションが水トさんだとは知らなかつた。でも、すごくいいナレーションだと思いました。

水ト ふだんは声を張つて高めのトーンですけれど、箱根駅伝のリポートでは「こちらは……」という低めのトーンで、間の取り方とか、語尾の上げ方とかを変えていきます。

駅伝も、実は入社一年目からずっと続けている仕事です。でも、女性は基本的に実況しないので、顔は出ない。大学に取材に行つて、選手一人ひとりに二〇分くらい時間をとつてもらつて取材をして、自分でまとめて実況資料をつくります。本当は、母校に取材に来るのが夢ですが、さみしいけれど慶應大学はまだ機会がなくて。この仕事のために毎年、すっぴん、髪を額の上で結んで、カップラーメン食べながらド深夜まで仕事、みたいな年末年始を過ごしていますが、思い入れがあるので気持ちを入れつつ、低めのトーンでナ

レーションをつけています。

駅伝は、特に言葉に気を遣う番組です。視聴率としても尋常じやない数字をとる番組ですし、それこそファンの方は年配の方がが多いですし。

井上 客観的に観ると、ただ走ってるだけで何がおもしろいと思うけど、ついつい観てしまう。でもそれには、ナレーションの力も大きいですよね。

水ト それはもう、先輩方の努力の賜です。選手に取材をして話を聞いていると、本当にそれぞれにドラマがあつて、そういうドラマをどういう言葉を使って紹介していくかというところに、かなり心を碎いています。

井上 それもあなたの仕事。

水ト 全部、アナウンサーの仕事です。実況に関しても、たとえば「いま何々君が抜かれました」と言うと、その家族はどう思うんだろうとか。だったら、「誰々が抜きました」と言ってあげたほうがいいよね、とか。

井上 なるほど。

水ト 故障してしまった選手に関して、あまりマイナスにならないような言い方はできないとか、そういうところは相当気を遣っています。

井上 それは言語学的ですね。

水ト と思います。言葉に関してはそうだと思います。

井上 すばらしい。うれしいよね、役立つことが。

水ト 大学で学んだことを役立てています（笑）。



将来の抱負と日々の訓練

井上 最後に、これからこんな番組をやりたい、というのはありますか。前に聞いたときに、「私はアナウンサーだから、言われたことをやる」と言って、かつこいいな、と思つたのですけど。

水ト アナウンサーは会社員なので、基本的に「やっぱりやりません」と言うことはありませんし、上が考えて仕事を振ってくれるので、そういう意味では何でもやります。

将来的にはもっと堅いものをやりたいと思いますが、いまは時間的にもニュースを読むことはないので、しばらくはこのままだと思います。でも、いざ言われたらいつでも異動できるように、研修は常に行っています。それこそ、アナウンサーの最大の仕事でもある緊急時の対応とか。地震のときには、緊急地震速報が鳴った瞬間にすべての番組をパッと切つて「すぐに逃げてください」とか、「体を守ってください」というアナウンスをすること

になつてゐるんです。そういう重大な責任を負つてゐるので、その部分の訓練をしています。これは毎日確認するだけでなく、定期的にみんなで災害訓練をしています。

そのときの言葉遣いいろいろ議論したのですが、津波のときは、とにかく一刻でも早く逃げてほしいんです。ただ「逃げてください」と言うのではなく、「逃げろ」と言うほうがいいか、なんなら「逃げろーっ！」って大声で言つたほうが心に響くのか。それも言葉が汚いけれど、何が一番届くんだろう、と考えたりします。基本的にはいま、「逃げてください、すぐに逃げてください」と言うことになつてますが、その部分を「どうしたら人は本当に逃げてくれるのか」ということをみんなで話し合つたり、一人でも緊急対応できるように訓練しています。

井上 それは僕からすると研究ネタにもなりそうですね。

水ト そういうふた議論をしたりしますし、緊急時の呼びかけは訓練しています。

井上 アナウンサーの仕事といつても、我々が観てているのはひょっとするとその一部だけかもしれない。

水ト 見せたくない部分、見せたくない顔、泥くさい部分もありますね。実は映つてゐる部分はほんの少しで、正直、本当はわりと鈍くさい感じが多いんです。それが好きなんですけれど。

井上

でも憧れの職業。

水ト

自分としては、そうです。

井上

よかったです。



就活のアドバイス

井上 会場の皆さんからご質問をいただいているので、いくつかご紹介します。「就活の質問で、水トさんの就活エピソードを聞きたいです。就活生へのメッセージがあればお願ひします」。

水ト 就活の際、面接で気をつけていたことは、「面接も会話」だということです。面接では、一分で自己紹介してくださいとか、三〇秒で何かを語ってくださいと言われることが多いと思いますが、結構やりがちなのは、自分で三〇秒の原稿をつくって、(早口で)「私の名前は水ト麻美です。水にカタカナの「ト」というような字を書くのですが、あれでウラと読みます。占うという意味があります。水トという名前ですが、ミトと読めるので……」みたいに、パパパパパって読んでしまう。そうすると、聞いているほうも「おおおおお」となって引いてしまうので、そうではなく、できれば、(抑揚をつけながらゆつ

くりと)「ここにちは。慶應義塾大学三年、水ト麻美と申します。私の名前は水トというんですか、ウラという字がカタカナの「ト」みたいな字を書くんです。でもカタカナではなくて漢字なんですよ」というふうに、相手に語りかける。たとえ面接官が相手であつても、頷く隙を与えるというか、相づちを打つてもらうよう、心がけていました。

面接とはいって、人との会話なので、一方的にならないことが大事だと思つています。あと、文語と話し言葉は全然違うので、基本的にはなるべく話し言葉を遣うようにしてましたね。たまに、面接なのに緊張のあまり「しかし」とか言う人もいますけど(会場・笑)、「しかし」ってしゃべつてるときにそんなに使わないですよね。ナレーションでも、「漢字ならわかるけど、聞いただけじゃわからないよね」というような言葉は、全部しゃべり口調に直して伝えます。面接も、相手に聞いてもらうことが大事なので、そうやって「相手に相づちを打つてもらひながら自分のことを話す」ということが、自分としては就活時に気をつけていたことです。

井上 これはすごく就活している方には参考になるお話をでした。

水ト 参考になればうれしいです。

井上 なかには一方的なコミュニケーションもありますが、インターラクティブな関係といふのは、コミュニケーションの本質といえば本質ですよね。



互いに尊敬するところ

井上 次の質問です。「教授と元教え子という関係ですが、お互いを尊敬しているところ、この先何年経ってもかなわないと感じるところがあれば教えてください」。

水ト それしかないです。かなうものなんか、何もないですから。

井上 同じ競争をしているわけではないので、比べられないと思います。僕もそうですよ。かなわないと言つたら、全部かなわない。だって、どうやつたつて女子アナ人気ナンバーワンにはなれないし（会場・爆笑）。

水ト そうですねー。それだけは私にしかできない（笑）。でも先生は、私たちのレベルに降りてきてくれるからうれしいです。

慶應の教授は皆さん、優しいというか雰囲気がありますが、「教授」と聞くだけで、「ああもう、普通の言語じゃしゃべれない」、学術的な言葉がバーッと出てくるんじやないかと思つて身構えてしまうんですけれど、それを私レベルの言葉に落とし込んで話してくれるのは、本当にうれしいですね。

井上 ただのオッサンですよ。

水ト ただのオッサンじやありません、すごいオッサンです（会場・爆笑）。

井上 ありがとうございます（笑）。もちろん、男と女も違うし。職業も違うし。

僕が尊敬していることの一つは、おごつてないところです。男でも女でもそうだけど、やはり有名になるとツンとしたり、「偉いオーラ」を出し始める人が多いから。それがいまのところ出ていない。それも尊敬するところだと思います。

高校生へのアドバイス

井上 さきほど、就活生へ向けてのメッセージをお話しくださいましたが、今度は高校の教員をしていらっしゃる先生からのご質問です。「本日は中高生の来場者も多く見受けられますが、進路に悩んでいる高校生に何かアドバイスをいただけますでしょうか」。

水ト 将来のことは、まだ決めなくてもいいんじやないかと思います。それぞれの勉強方法もありますし、それぞれのお考えがあるとは思いますが、私が少し悲しいなと思うのが、せっかく大学に入つて四年もあるのに、いきなり就活のことしか考えられなくなつてしまふのは、すごく寂しいことだと思うんです。大学受験の準備は、早くから始めることに越したことはないと思いますが、就職のこと考えて学部を選んだり、すべてを就職に結びつけて活動するのは寂しい。理由づけなんて、あとからいくらでもできるのですから、就

活ありきで何かをするより、あとから振り返ってみたら、あれが役に立つてたな、と思えるように、いろいろなことにチャレンジしたほうがいいと思います。先の目標だけではなく、とりあえずやりたいことをやつたほうが、私の周りでもうまくいっている人が多いような気がします。あまり先を見すぎず、気楽にやるものいいのかな、と思います。高校時代はいろいろ悩む時期ですけれど、意外と短期の目標で気楽にしてたほうが先は見えてくるのではないか、というのが私の感想です。



大学時代にやればよかったこと

井上 最後の質問になりますが、「大学時代、やってよかったこと、やればよかったこと」。水ト やればよかつたことばかりですね。正直、大学でもっと時間を使えばよかつたと思います。海外に行つておけばよかつたというのが一番です。自分が悪いんですけど、四年生のとき、日々ここに来ていたので、あまり自由が利かなかつた(笑)。そういう意味では、きちんと学生生活を送つて、四年生でいろいろな旅をするというのはアリだつたなと思います。そういうことをしておけば、今の仕事にもつながることがいっぱいあつたのに、見ておけばよかつた、やっておけばよかつた、というのはすごくたくさんあります。

でも、後悔してもしょうがないので、いまはなるべく時間を見つけていろんなところに行
くようにはしています。

井上 まだ二八歳だし。これから。

水ト はい。

井上 では、これからも活躍を期待しています。僕はずつと応援しています。

水ト 勉強したことが、気づいたらこんなに言語学とつながっていることがいっぱいあつた
んだという、発見の多いお話でした。本当に今日は皆さんお忙しい中ありがとうございます。
した（会場・拍手）。

「伝えるしごと・ことばのしごと」

一一〇一五年六月十三日 慶應義塾大学・南校舎ホール

- * 1 「あやめヒトリエ」：「ヒトリエ」の朝の番組。
- * 2 小島恭子：「あやめヒトリエ」担当のヒトリエアナウンサー。
- * 3 日テレNEWS24：日本テレビの「ニュース専門」有料チャンネル。
- * 4 「ユルナントベ」：日本テレビの昼の番組。水曜さんが担当。